



NO-MA
Borderless Art Gallery NO-MA

2004年春、滋賀県近江八幡の古い町屋がギャラリーに生まれ変わり、いよいよオープンします。名前は
ボーダレス・アートギャラリーNO-MA。

障害の有無を超え、作品を通して、人が持つ表現へのエネルギーや謎が交差する、ボーダレスなアートの場所をめざします。

アート関係者、福祉現場スタッフ、学術研究者、行政が枠を超えアイデアを出し合って構想を練ってきました。

ボーダレス・アートギャラリーNO-MAがどんな交信の場になってゆくのでしょうか。一見、新しいアートとは無縁そうに見える、のんびりと流れるこの街の時間が、思いもかけない何かを育ててくれる…。そんな予感をほらみつ。

どんな夢もその空白を埋めてゆくのは、結局「人」です。



表現のルーツと出会えるところ

今井祝雄(造形作家・成安造形大学教授)

私自身、いわゆるアウトサイダーアートに改めて関心を寄せることとなったのは、勤める大学の学生たちが、地元滋賀県下の障害者施設にアートサポーターとして参加するようになったことによる。そんな縁で、近江八幡に今春、開設予定の「ボーダレスアートギャラリーNO-MA」を立ち上げるための委員会の座長として、昨年からの微力ながらお手伝いさせていただいている。

どんなギャラリーにするのか、そのネーミングも含めて施設の望ましい指針をさくるところから、大正期の町屋を改装する設計にいたるまで討議を重ねてきた。そこでアウトサイダーアートの成果を並べるだけなら、それらを逆に囲い込むことでしかない。そうではなくて、アウトサイダーアートを軸に広く表現の根源とふれあえる、開かれたアート現場に、という方向性が示された。

そのひとつに、現代美術の先端的な表現者とのコラボレーションがある。昨秋、オープンに先立つイベントの第1弾では、改装前の同所において、音と光の2人のアーティストとアウトサイダーアートの絵、オブジェによる実験的展示が試みられた。

続いて、ほど近いかわらミュージアムにおける県下の福祉施設でつくられた粘土造形の展覧会とシンポジウム、3月にはワークショップとトークの企画など盛りだくさんのこの1年であった。

個人的には、私もメンバーであった今はない具体美術協会(通称グタイ)の拠点が明治期の商家の土蔵をリニューアルした美術館であったことや、そのグタイが岸屋における童美展という、とらわれのない子どもたちの活形表現に深く関わってきたことも、このたびのギャラリーづくりと何か通底している。

ヒトはなぜ絵を描くのか?モノをつくるのか?その問いに障害の有無は存在しない。NO-MAがそんな表現のルーツと出会える場所となればよい。

近江八幡に誕生する 新しいアートの体温

「の間」のゆめ

小暮宣雄(京都橋女子大学助教授)

NO-MAの黄昏に、すわっていたい。
NO-MAの録音は、わたしのお尻とどんな会話を交わすだろう。夕靨が支配するあかね色のひととき。
NO-MAから見える空は、どのようにして暮れていくだろう。昼と夜との間(あいだ)。太陽と月の間。家路へとつながる長い影。
NO-MAの空気はだれの匂いを運んできてくれるのだろう。NO-MAで聴く近江八幡のざわめきは、ここにどのような音や声として届くのだろう。
いまだないものを思いながら、かつてあったかも知れないものを捜す。
未来が過去に混じり合い、滋賀の里に鳥たちが舞い降りる。

里とアーツの間。社会と芸術の間。時代と芸術の間。実利と公益、実技と演技、実相と仮想。リアとバーチャル、権柄と記録。

アーツマネジメントは、これらさまざまな「間」(隔たりと出会い)、そして「と」(傍らにいる伴走者)を渡る実践である。「間」というほどよい隙間をスキップし今に生かす「と」の営みである。生活と芸術を峻別する境界はすでに形骸化しつつも、いまだその間を生かす人たちが、「と」に宿する痕跡はあまりにも少ない。

福祉とアーツ。この「と」という動詞に込められた思いをカタチにすることが、きっとNO-MAでのマネジメントなのだろうと思う。「と」という「傍ら」に建付けたい、互いを行き来しつつどちらの間でもない就寝後の楽しみ、黄昏にどきどきする道草の復讐である。

少し突飛な希望だけど、黄昏をじょうぶんに味わったあと、さらに、NO-MAの夜明けをも体験したい。

NO-MAでは、朝日がいちばんさきにどこを照らすのか、かつて野間さんたちが毎日そうしたように夜明けに目覚め、近江の朝を感じてみたい。NO-MAがかつてこの地域とともに24時間あったときと同じように、訪れる人たちがときにはここにおけるすべての時刻を呼吸できたらどんなに素晴らしいことだろうと夢想する。これは夢なのだが、そういうことまで夢見させるNOMA。

それもこの「の間」のちからなのだろうと思う。



光と音に包まれた『野間邸』の 4日間

山下里加(美術ライター)

ボウダレスギャラリー「NOMA」のプレ・オープニングイベント『記憶の測量計—近江、町屋の月あそび—』は、この“場”の行方を予感させる刺激的な展覧会であった。

案内チラシを片手に、駅から近江八幡の町を歩いてみた。現地に近づくにつれ、昔ながらの町屋が増えていく。その中にヴォーリス設計の洋館もなじんでいる。「でっち羊羹」や「近江牛」の看板も気になる。おばあち

も、この家ならではのものだ。

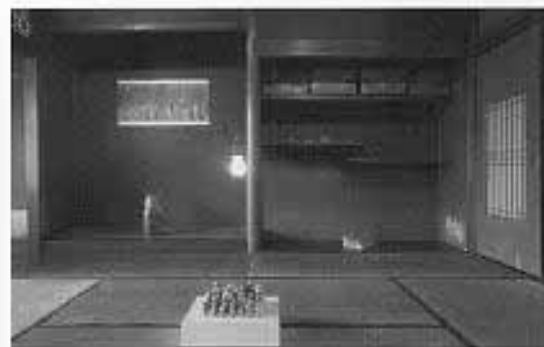
裏の縁側から中庭に下り、土壁づくりの蔵に行く。重い扉を開けて入ると、またもや中は真っ暗。母屋よりさらに完全な闇だ。ところが、僅に目が慣れてくると、床に同心円状の美しい光が見えてきた。人間の視覚の不思議さに驚ながら、湧き水のような光に見とれていた。

母屋に戻り、2階へ上がる。ここは、明るい日差しに満ちていた。客間だったという部屋の中央には、高さ10センチほどの台の上に紙箱のような陶器人形がさっしりと並んでいる。座って視線を低くして眺めると、

たとのこと。

近年、福祉施設で制作された作品による展覧会は増えてきているが、本展のように現代アートの文脈で活躍するアーティストと共に展示される機会は少ない。今回は特に、藤本が展示を手がけることによって、それぞれの作品が空間の中で、実に新鮮かつ魅力的な姿を見せていた。

同ギャラリーは、障害のある人の表現活動を核に多様なジャンルの、様々な人と境界を越えて関わっていく場を目指している。また、改装前のプレイベントとしては、近江八幡という美しい町並みの中で歳月を重ね



ゃん達が立ち話をしている横で、我がひなたぼっこをしている。今どき珍しい、個性と生活が一体となった町だ。

展覧会場の『野間邸』は、昭和5年に建てられた町屋らしい町屋だ。特徴的な木塙をくぐり、庭を抜け、土間で靴をぬぐ。祖父母の家を訪ねたような懐かしい感じだ。

ところが、1階は真っ暗。時折、サーチライトのような光りが闇を精切っていく。3室のうち真ん中の1室は完全に閉ざされ、そのふすまや欄間の隙間から隣室や廊下に緑色の光が漏れ出ているのだ。光はぐるりと回転しながら、部屋と観客である私たちを照らしては、闇へ還していく。まるで巨大な「回り灯籠」だ。ふと気づくと、不思議な和音も聞こえる。家の中を歩き回るにつれ、複数の和音が重なり、別の音階へと移行する。ごく普通の日本家屋なのに、未知の世界を探検しているよう、それでいて、欄間の細工や柱のわずかな傾きから漏れる光も、畳やふすまにやわらかに反響する音

より可愛らしい。立派な床の間には、素焼きの陶器作品とクレヨン画が設えられている。隣の部屋の押入だった場所には、真っ青な板の上に渦巻き状のオブジェがずらり、蟻塚のようなノブのオブジェもある。積み木のようなカラフルな箱は、オルゴールになっており、自由にネジを回して鳴らすことが出来る。部屋の片隅や広い縁側には、モダンな椅子が置かれている。座り心地がよく、腰をおろすとなかなか立ち上がれない。忘れていたゆるやかな時間が流れていく。

畳の上に座り込み、企画者のはたましこと話し込む。母屋の1階と蔵の“光”は、現代アーティストの笹岡敬の作品。音はサウンドアーティストの藤本由起夫が、2001年のベネチア・ビエンナーレ出品作品と同じ音源、音程で設置した作品だそう。2階の陶器や絵画は伊藤喜彦や木村嵩、小野真理子ら滋賀県の知的障害者施設で制作する11人の作品。オルゴールは藤本の新作であり、椅子をふくめて藤本が2階全体の空間構成をし

た『野間邸』のままに家屋に染みこんだ“記憶”を多くの人と共有し、さらに改装後のギャラリーとしての活動にも興味を持って見守ってほしいという目的もある。『記憶の測量計』展は、その2つの目的を見事に果たしていた。チラシなどの広報やスタッフの応対もふくめて展覧会としての完成度の高い展覧会であり、訪れた人達には、障害のある人の表現活動を素直に楽しむ機会にもなっただろう。

だが、少しだけ疑問もある。福祉施設で作られた作品は、2人の現代アーティストの意図にどんな影響を与えたのだろうか。彼らのいつもの通りの仕事を高いレベルで見せてくれた展覧会だっただけに、より新鮮な出会いをも期待してしまう。

「NO-MA」は、これまでなかった“アートの現場”だ。現代アートや現代アーティストを呼び込んで福祉の世界に新鮮な刺激をうながすと同時に、現代アートおよび広く社会へ波及していく場となることを願う。





響きあう場

井上 正隆(もみじ斎寮長)

日々障害をもつ人たちと接していて、ある日突然すごい作品が誕生する場面に出会うことがある。一人で見ているのがもったいない。そんな時、至福の時間を共有できる場があたらしいと思う。

プロの作家の個展に障害者の作品を一個ほうり込んでみる。その逆もあり。世界中の障害をもつ人たちのジョイント展もある。様々な可能性をもった破天荒な試みがこのギャラリーにあたらしい。

「歌う・踊る・描く」この三つは、人間が誕生して以来あったもの、人間の生の欲求本能のようなものではなかったかと考えている。障害をもつ人たちに、より美の世界が身近かなものになることで、この人たちの秘めている表現の世界が爆発するかもしれない。そんな期待もっている。

障害をもつ人の表現は、一つの文化だとおもう。生の目線の違いは大きい。表現の回路が違うから面白い。

ボーダレス・アートギャラリーNO-MAが、違いを認め合い、響きあう空間として在る。そんな場に育ってほしいと願っている。

フシギなアート体験

(企画展を鑑賞した大学生の感想)

近江八幡の町屋周辺は、どこことなく母方の祖母の家の近所を連想させた。昔からずっと貼りつけっぱなしのようなポスタや看板などが時々見える場所。アートギャラリーNO-MAの中に入る前から私自身はあの町屋の中ですでにアートの世界に入っていたように思う。

NO-MAでの催し物、「記憶の測量計」は、授業の為に美術館に行くというのとは感覚が少々違っていた。どちらかというと、遠縁のおばちゃんの家に友達を連れて久々に訪ねていくといった感じだった。だからワクワクしていた。本当にワクワクして、自分が10才前後くらいの頃に戻ったような感じをうけていた。美術作品を見に行くのに中に入る時に「おじゃまします」なんて言ったのは初めての体験だ……。

私の中で、NO-MAの中に入った後でも、やっぱりそこは遠縁のおばちゃんの家という感覚だった。子どもが田舎へ行って、普段は身の回りにない建築の中に好奇心を抱いて、友達と家の中を走り回る——そんな感覚だった。

だからか、二階へ上りイスに座り眺め、本を読む20代の男性、夫婦で仲良く外を見る中年カップル、イスで寝ているおじいちゃんが全て、自分の本当の家族や親戚のような、無言で流れる懐かしい空を共有していた。受付の主催者側の女性たちとごく自然に談笑していたのも、全てはこのギャラリーNO-MAが野間邸としての独特の時間や空気持っていた力だろう。作品を見ている「障害者の作品」、「健常者の作品」などは、いちいち思っていなかった。ボーダレスというよりもfamilyなんだゾ、という感覚を持ったことは異様に覚えている。私と友達は帰り支度をしながら主催者の方々と話をして、NO-MAが改修されることを知った。

バリアフリー化するのだから大賛成なのだが、「あの奥の井戸は残してほしい」等、まるで我が家のような注文をつけていた。今回初めて行ったくせに、それだけ、人々の間に流れる“空間的感覚”を共有させた野間邸の雰囲気こそこの催し物のメインだと思った。

美術館の廃墟にアウトサイダー・アートを

服部 正(兵庫県立美術館学芸員)

日本の美術館を取り巻く状況は、暗い。新しい門出をめざす本誌の冒頭から繰起でもないが、やはり暗い。予算の大幅な削減、作品購入費の凍結、有能なベテラン学芸員の左遷といったニュースにも驚かなくなった。ついには、美術館の将来的な閉館を公言する自治体も現れた。

当然といえば当然のことだった。日本の美術館が明るかったのは好景気の時代。そこにあったのは、景気も良いし、やはりこれからの町づくりは文化でしょ、という安易なお題目だけだ。そこで何が行われ、社会的にどのような役割を担っていくのかというビジョンは何もなかった。何も無いままに美術館だけが作られ、景気の後退とともに厄介者扱いされるようになった。

そもそも、日本に初めて「美術館」と呼ばれる建物ができたのは1877(明治10)年のことだ。大政奉還後わずか10年というのは、西洋文化が急速に押し寄せた時代を考えると、早いほうだと思う。だが美術とは名ばかりのその建物は、内閣勸業博覧会の会場内に建てられたパビリオンに過ぎなかった。博覧会が閉幕すればぶち壊される仮設的なもので、コレクションもなければ学芸員もいない。展示スペースだけの「美術館」だった。このあたり、とても日本的ではある。西洋の表層だけを真似たのだ。

とはいえ、日本人に美術を鑑賞する習慣がなかったわけではない。美術館という作品鑑賞の箱モノがなかっただけだ。江戸時代には、書画会なるものがあった。料亭などの座敷に画家や愛好家が集い、酒席を共にしながら書画の鑑賞を行った。興が来れば、客の求めに応じて画家が即興

で描くパフォーマンスも行われた。

草創期の油絵の普及に努めた洋画家高橋由一は、この書画会のような鑑賞態度に批判的で、「螺旋展画閣」という独自の美術館を構想して政府に建白書まで提出した。そのことの意義はともかく、個人的には上っ面だけの西洋的な美術館建造物よりも書画会のほうが好ましいと思う。

私は、そのような意味でNO-MAに期待している。人々が普通に生活する町の中で、お茶を飲みながら、そして時には酒を飲みながら新しいアートを提案できるなんて、とても素敵なことではないか。

アートとは、そが作られた瞬間にアートとなるのではなく、社会に居場所を見つけた時にはじめてアートとなる。バリアフリーを標榜するNO-MAが、アウトサイダー・アートにとって心地よい居場所になってくれれば良い。

障害がある人や占い師、民間の宗教者や独居老人などの作品を指すアウトサイダー・アートは、19世紀末にヨーロッパの精神科医たちが収集を始め、1920年代に前衛的な芸術家たちが注目した頃からアートとして認知されるようになってきた。有史以来、常に障害をもつ人はいたはずだ。それなのに、作品は残っていない。私たちが目にするのは、すべて19世紀後半以降のものだ。それ以前のもの、アートと認識されることなく捨てられてしまった。何がアートかは社会の中で決められるというのはそういう意味である。

日本の場合、アウトサイダー・アートが社会的に認知されたのはさらに遅かった。おそらく、1990年代に入ってからだろう。それは、好景気を謳歌した美術館が閉館を迎えた時期と重なっている。この一致は偶然とは言い切れないだろう。

アウトサイダー・アートには、王道に対するアンチテーゼという側面がある。アウトサイダー・アートの作り手たちは、正

規の美術教育を受けていない人がほとんどであり、その点で美術の本流とは対極にあるからだ。ヨーロッパの場合、そのアンチテーゼとしてのパワーは、前衛芸術家たちとタッグを組むことによって炸裂した。美術の王道に背を向けた前衛的な芸術家たちは、アウトサイドの作り手たちを自分たちの同志と考へて賞賛したのである。

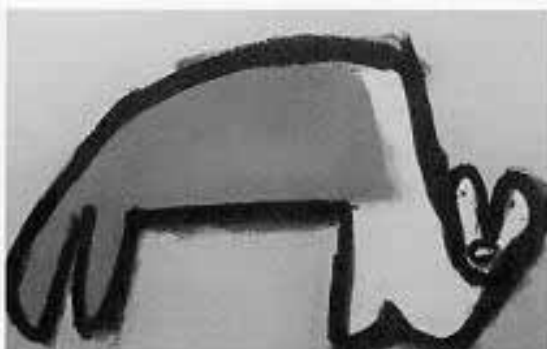
日本の場合は、前衛芸術家たちの戦いの場にアウトサイダー・アートが顔を出すことはなかった。西洋の前衛芸術家たちを先駆者として、闘争の同志とすることができたからだ。日本の社会がアウトサイダー・アートに目を向けたのは、西洋近代の価値観への疑いからだった。

江戸末期の開国からこのかた、日本は西洋文明を食欲に、そして多くは無反省に取り込んできた。機能と効率を優先するその合理主義的な価値観が見直されるためには、社会の経済的な破綻が必要だった。

好景気に乗じて作られた日本の美術館は、銀行の破綻と同じ道をたどりつつある。だからこそアウトサイダー・アートなのだ。西洋的な美術館の表層を真似るよりは、書画会を思い出せばよい。西洋美術の伝統へのアンチテーゼとしてのアウトサイダー・アートは、そこでの切り札となるだろう。

私が書画会を持ち出すのは、陳腐な古趣味ではない。進歩思想の屍の上に、新しい価値が芽吹きそうな予感があるからだ。

アート・スペースとは、新しいアートの価値を社会に認知させていく場所でもある。新たに出発するNO-MAから、新しいアートのあり方が示されるとすれば、それに立ち会える私たちは幸福だ。日本の美術館の将来は暗いかもしれないが、NO-MAの未来は明るいと思う。



右脳バンザイ体験講座

2004年3月20日(土・春分の日)京都大学総合博物館

●ワークショップ(2階第2企画展示室)障害のあるなしに関わらず、表現活動を共同し合うワークショップ。
みんなこぞって自由になろう。

ワークショップA 午前10時30分～午後12時(受付:午前10時～)

「即興、笑える絵画」ナビゲーター:はたよしこ(絵本作家・アートコーディネーター)

ワークショップB 午後1時～午後2時30分(受付:午後12時30分～)

「私のダンスみんなのダンス」ナビゲーター:山下残(ダンサー・振り付け家)

●トークショー(2階セミナー室)人の表現エネルギーはどこからくるのだろう。遍的な問題として、多様な観点から語り合う。

「表現活動の源とは」午後2時45分～午後4時30分

山中康裕(臨床心理医・京都大学大学院教授)、今井祝雄(成安造形大学教授)、山下残(ダンサー・振り付け家)

コーディネーター:はたよしこ

参加費=一般400円、大高生300円、小中生200円、障害者無料(料金は博物館の入館観覧料です。)

※参加者は事前申し込みが必要です。

※定員・ワークショップA、Bともに、各25名(障害のある方10名、それ以外の方15名、ただし見学者に定員はありませんので自由にご参加下さい。)

・トークショー60名

※申し訳ございませんが、先着順にて定員になり次第締め切らせていただきますのでご了承下さい。当日、ワークショップご参加の方は、動きやすく汚れてもよい服装でお越し下さい。

□主催=ボードレス・アートギャラリー運営委員会

□お問い合わせ・お申し込み先=社会福祉法人社会福祉事業団企画事業部 TEL(0748)75-8615 FAX(0748)75-8868

予告

オープン記念企画展「私あるいは私」—静かなる燃焼系— 2004年7月中旬～9月中旬

ボードレス・アートギャラリーNO-MAがこれから目指していく形を斬新な切り口で見ていただく企画展です。アウトサイダーやインサイダーという既存の枠にとらわれず、あなたの生の感性でこの展覧会を体験してみてください。6人の表現者が織りなす熱い表現世界をぜひご期待下さい。

■イベントのご案内

<p>「コラボレートする!〜伊賀歴史と工芸」 橋本理馬 実行 NPO法人もうひとつの美術館 ☎0287-92-8088 2月21日(土)～5月23日(日) 月・火休館(祝日は開館)</p>	<p>「利し子と陶芸展」 滋賀県東近江市歴史民俗博物館 栗原なつよし 実行 ☎077-552-5413 2月19日(木)～22日(日)</p>	<p>「湖北会作品展」 滋賀県長浜市長浜アルプラザ平和堂 湖友会 ☎0749-79-1150 2月20日(金)～2月23日(日)</p>	<p>みずのきの絵画展 —内なる声を聞いた画家たち— 京都市・志文園美術館 ☎075-751-1777 3月1日(日)～3月31日(木) 月休館(3月1日除く)</p>
<p>「アートリンク2004」 神戸市・元町みなせ画廊 ひと・アート・まち兵庫 たんぼぼの家 ☎0742-43-7055 3月4日(木)～15日(日)</p>	<p>「アートリンク2004(展示2)」 神戸市立こうべまちづくり会館 ひと・アート・まち兵庫 たんぼぼの家 ☎0742-43-7055 3月19日(金)～23日(火)</p>	<p>「アートリンク2004フォーラム」 神戸市立こうべまちづくり会館 ひと・アート・まち兵庫 たんぼぼの家 ☎0742-43-7055 3月7日(日)</p>	<p>「KALEIDOSCOPE—6人の個性と表現」展 そごう神戸店・新館8階 ひと・アート・まち兵庫 たんぼぼの家 ☎0742-43-7055 3月9日(火)～3月14日(日)</p>
<p>エイブル・アート舞台人養成講座東京公演 報告フォーラム 国立オリンピック記念青少年総合センター エイブル・アート・ジャパン ☎03-3364-2190 3月13日(土)・1日(日)</p>	<p>「障害のある人のパフォーマンス」 神戸市・風月堂ホール ひと・アート・まち兵庫 たんぼぼの家 ☎0742-43-7055 3月5日(金)</p>	<p>「アートとソーシャル・インクルージョン」 フォーラム 奈良県新公会堂 たんぼぼの家 ☎0742-43-7055 3月20日(土)・1日(日)</p>	<p>「泣き虫太郎」 滋賀県野洲文化ホール ☎077-587-1906 デフ・パペットシアター・ひとみ 3月23日(火)</p>
<p>「湖北会作品展」 滋賀県東近江市湖北会 湖北会 ☎0749-79-1150 3月28日(日)</p>	<p>「まほろば・楽市・楽座」 奈良市奈良町善見 たんぼぼの家 ☎0742-43-7055 4月3日(土)～11日(日)</p>	<p>美と用のあいだコンクール2004 入選作品展 奈良県美術館 たんぼぼの家 ☎0742-43-7055 4月7日(木)～11日(日)</p>	<p>「夢をかたちに」展 滋賀県彦根市ビバティアー・森様 森様学園 ☎0749-22-2066 4月24日(土)・25日(日)</p>

ボードレス・アートギャラリーNO-MA:滋賀県近江八幡市永原町上16

発行者・お問い合わせ先:〒520-3216 滋賀県甲賀郡甲西町若竹町25-13 サングリエール甲西1階

社会福祉法人滋賀県社会福祉事業団企画事業部 TEL:0748-75-8615 FAX:0748-75-8868